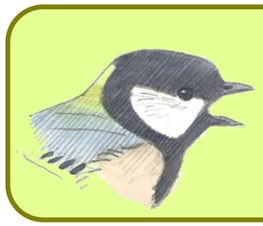


ささえあう生命の輪 野鳥のすめるまちづくり計画

区内では、樹木の数が減少するなど、自然環境が変化しています。こうした中でも、庭や公園などの身近なところには、さまざまないきものがくらしています。目黒区生物多様性地域戦略「ささえあう生命の輪 野鳥のすめるまちづくり計画」は身近な自然を守り、いきものたちと共に暮らせるまちを未来に伝えていくための計画です。

○シンボルとしての野鳥

・みどりのつながりのシンボル
散在するみどりを行き来し、緑地を基盤に生活している野鳥を、エコロジカルネットワーク形成のシンボルとして扱います。

・いきもののすめるみどりへの転換のシンボル
植物や昆虫等の小動物など、餌となるいきものの種類や数が豊富で、生息に適した環境があればあるほど、多くの種の野鳥が生息できます。みどりの量の確保だけではなく、いきもののすめるみどりへと質の転換を図るシンボルとして、野鳥を位置づけます。

・区民に親しまれるまちづくりのシンボル
区民に親しまれ、身近な暮らしから生物多様性が確保された自然と共生する社会を目指すきっかけとなる野鳥を、まちづくりや活動のシンボルとしてとらえます。

○生物多様性とは

生物多様性とは、さまざまな「自然」があり、そこに特有の「個性」を持ついきものがいて、それぞれの命がつながりあっていることをいいます。食料や水の供給、気温等の安定、水質の浄化、わたしたち人間へのうるおいや安らぎの付与など「生態系サービス」と呼ばれる「自然の恵み」は、生物多様性のバランスの上に成立しています。しかし、近年世界中の人々の消費活動の負荷等によって生物多様性の損失が進行し、地球の生態系に重大な変化をもたらす恐れがあるといわれています。

○生物多様性の４つの危機

開発など人間活動による危機
経済性や効率性を優先した開発、観賞用・商業的利用による乱獲などによって、いきものの生息・生育環境が減少・消失しています。

人間により持ち込まれたものによる危機
外来種など、人間によってほかの地域から持ち込まれた生きものが、地域固有の生態系を大きく変えてしまっています。

自然に対する働きかけの縮小による危機
人の手が加えられ、その環境に特有の多様ないきものを育んできた里地里山は、人が手を加えなくなったことで環境が変わり、そこにすむいきものの種類が大きく変化しています。

地球環境の変化による危機
地球温暖化による生物季節の変化、気温上昇による降水量の変化などの気候変動によって、地球上の多くのいきものの絶滅のリスクが高まる可能性が高いと予測されています。

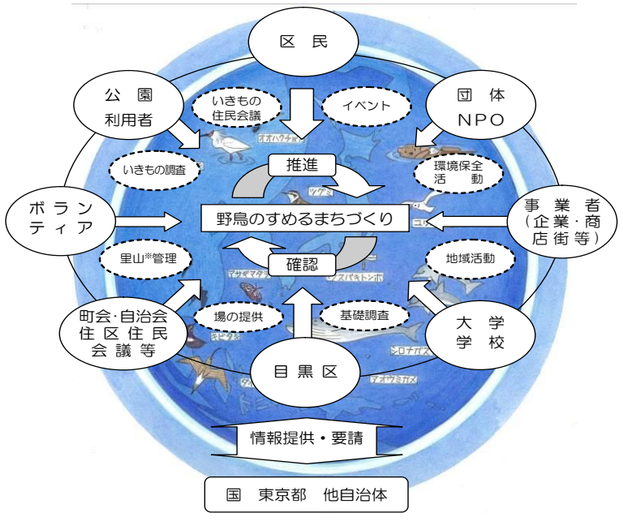
○一人ひとりのチェックリスト（抜粋）

野鳥のすめるまちづくりのためには、私たち一人ひとりが、それぞれが主役になって日常的な活動の中で生物多様性に配慮することが必要です。

区分	チェック内容	チェック欄
みどり	玄関先やベランダ等、家の周りでみどりを育てます	
みず	雨水を園芸用などに利用します	
	目黒川をのぞきこみ、そこにすんでいるいきものを知ります	
食	なるべく地元や近郊でとれたものを食べ、旬のものを味わいます	
	自分が食べられる量の食材を用意し、食べ残しや食材のあまり(食品ロス)を出さないようにします	
ふれる	みどりの散歩道を歩き、目黒の社寺や公園を訪ね、身近な自然にふれます	
	花とみどりの学習館や、駒場野公園自然観察舎、碑文谷こども動物広場※などの活動に参加します	
楽しむ	花見や菖蒲湯、七夕やお月見など、季節の行事を楽しみます	
知る	めぐろ歴史資料館や東京大学自然科学博物館などを利用し、地域の歴史や文化を知ります	
伝える	季節の移ろいや自然の素晴らしさを感じ、写真や絵、文章などで伝えます	
まもる	生態系に影響を与える農薬、化学肥料、除草剤等の使用を控え、いきものの生息環境への負荷を減らします	
えらぶ	環境に優しいエコラベル商品を選び、エコバックを持参して買い物します	
みなおす	まちに出かけるときは、歩いたり、自転車を使ったりして、ゆっくりと周りの風景を眺めるようにします	
いきもの	ペットを飼ったら、最後まで責任を持って面倒をみます	
	野外でいきものに餌をやりません	
事　業	生物多様性への理解を深め、自治体、地域住民等との連携･協働を図ります	
	店や事務所の屋上、壁面、テラス等を緑化します	

○みんなで取り組む体制づくり

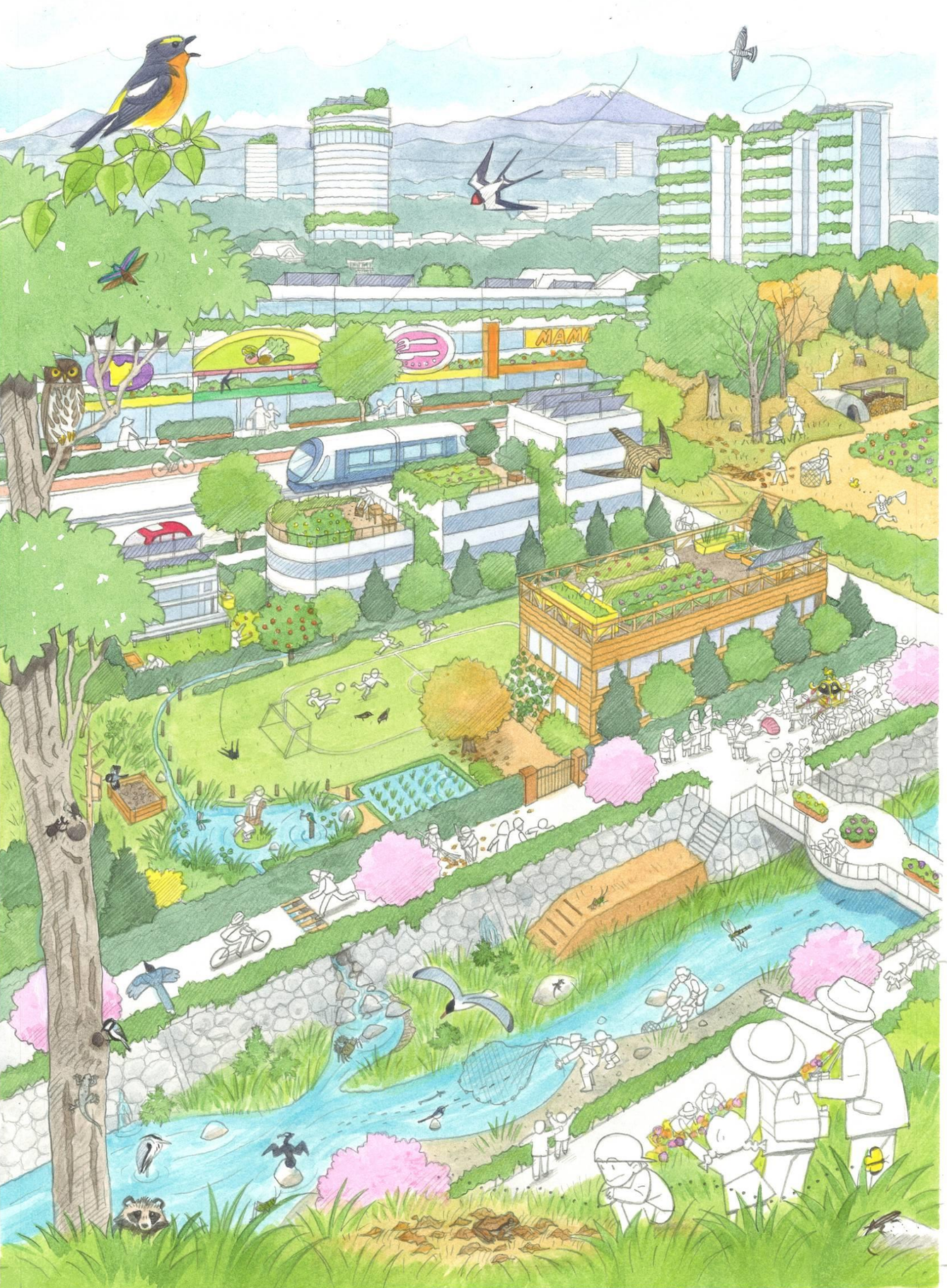
「ささえあう生命の輪　野鳥のすめるまちづくり計画」を推進していくためには、各主体がそれぞれの役割を果たすことが重要です。区は、さまざまな主体の連携に必要な情報共有・交換の場、支援など本計画を推進していくための土台づくりに取り組みます。



◎未来図の中のいきもの

鳥キビタキ、オオタカ、ツバメ、アオバズク、チョウゲンボウ、カワセミ、オナガ、シジュウカラ、ユリカモメ、アオサギ、カワウ、ハクセキレイなど　魚ウナギ、アユ　動物ヤモリ、トカゲ、ヒキガエル、タヌキ等　昆虫タマムシ、ミツバチ(養蜂)、クワガタ類、カブトムシ、シオカラトンボ、オニヤンマ、キチョウ、バッタ類等

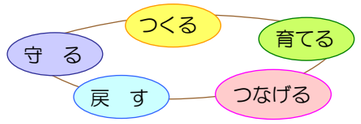
目黒区生物多様性地域戦略　ささえあう生命の輪　野鳥のすめるまちづくり計画　概要版
目黒区都市整備部みどりと公園課みどりの係
〒153-8573　目黒区上目黒２－１９－１５　　TEL 03-5722-9359　FAX 03-3792-2112
計画（全文）は目黒区のホームページで閲覧・ダウンロードできます
目黒区トップページ→行政情報→計画・政策→計画・施策→環境保全で自然にもやさしく
http://www.city.meguro.tokyo.jp/gyosei/keikaku/keikaku/kankyo_hozen/index.html
主要印刷物
25－38



未来のすがた　野の鳥の歌が聞こえるまち

- 住宅地やビルの屋上にみどりがあふれ、まちかどにも木々が育ち、区の鳥シジュウカラをはじめ、四季折々の野鳥と出会うことができます
- 春の花や秋の紅葉など移ろう季節の中で、身近な自然に親しみ、四季折々の地域の祭事や、旬の恵みを使った食事を楽しんでいます
- 土に親しみ、収穫する楽しみを都市でも味わうことが広がり、庭や屋上、公園などの菜園で野菜を収穫しています
- 日本伝統の生け花や茶道などのほか、目黒の伝統文化の担い手が育ち、目黒ばやしや剣の舞などが、お年寄りから子どもまで区民の中に脈々と引き継がれています

目標１　みどりの風景をまもり、いきものにやさしさのある環境をつくります

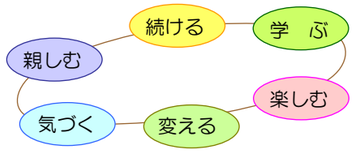


いきものの生息に配慮した環境づくり	人と自然をつなげる場を整える	みどりといきもののネットワーク形成	いきもののすめる土・地面･水辺の保全

私たちの取り組み例※

- 雑木林の手入れにより、スミレなどの在来植物の生育環境をまもる
- 公園や公共施設等の舗装は最小限として、いきもののすめる土や地面を確保する
- トンボ等のすめるビオトープ池の設置とビオトープ活動で、水辺の環境を戻す
- 花や実、紅葉など、季節や旬を感じる植栽を推進する
- ベランダにプランターや水盤などを置き、野鳥や昆虫を呼ぶ環境をつくる
- 区民参加型いきもの調査を継続し、いきものへの理解を育てる

目標２　自然とのふれあいを大切にしためぐろの暮らしを未来に伝えます

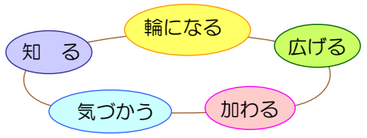


自然とふれあう原体験を大切にし人材を育成	自然との関わりの中で育まれてきた文化を伝承	「歩いてみる・知る・耕す」ーまちを歩くことからはじめる	生物多様性に配慮したライフスタイルへの転換

私たちの取り組み例※

- 外来生物の取り扱い「入れない、捨てない、拡（ひろ）げない」について、普及・啓発する
- 公園活動やグリーンクラブ活動等のボランティア活動を通して、みどりに親しむ
- 「もったいない」の視点で、水や食物を無駄に消費する生活を変える
- 公園や目黒川などに出かけて、お花見や紅葉を楽しむ
- いきものの環境の変化をとらえるために、身近な自然の観察を継続する

目標３　すべての主体があらゆる活動で「ささえあう生命（いのち）の輪（わ）」の確保を目指した協力と連携を行います



自然とふれあう活動を通して地域づくり	サクラや公園の自然を活用したみどりの観光都市づくり	住民参加による公園活動の活性化	区民・事業者・団体・学校・行政等が一体となってささえあう生命の輪をつなげる	いきもののつながりに配慮した事業活動

私たちの取り組み例※

- 自然観察のまち歩きやいきもの発見隊に参加し、身近ないきものを知る
- 家庭、事業者、学校等で一人ひとりの生物多様性に配慮した活動を実践する
- 公園活動登録団体などの活動に参加する
- 区民の手によるどんぐりからの森づくりなど、木々を育てて森を広げる

※区民、団体、事業者、学校、行政等が参加・支援・連携して取り組みます

◎未来図の中にいるいきものを探してみよう！答えは裏表紙にあります。